

彙報

● 史學研究會

例會 二月十六日、午後一時より學生集會場樓上に

於て開催、左の講演あつて午後五時閉會した。

支那江南の民屋

文學士 藤田 元春君

本號に掲載せられたるを以て略す

民藝に就て

柳 宗悅君

工藝には個人的の物と民衆的の物とがあり、後者を民藝といふ。民藝は美を目的としたものではなく實用を目的としたものであるが其中には卓越せる美が現はれてゐるものがある。茶人殊に初代の茶人が好んだ物は殆ど民藝品で又偉大な個人作家が美の標準とした物も民藝品であつた。民藝品は一種の自然法則に支配されてゐる。自然法に従へば美は現はれるものなる事を民藝品は示してゐる。斯様に觀察すれば美の標準が從來の見方と異り從來全く看却されてゐた民藝品にも美があるといふ事が出

来る云々。

讀史會

例會 一月十八日午後六時半より樂友會館第一號室

に於て開催。三浦教授中村助教其他四十二名來會。徳丸君の研究發表及び船津布村兩君の卒業論文梗概發表ありて十時半散會す。

元祿前後に於る經濟思想

徳丸 福藏君

家康以來の學問獎勵儒學盛行の影響として經濟問題を論議する者が元祿前後に於て著しく増加した。徂徠蕃山素行等を中心としてその思想を見る。經濟は「凡そ天下國家を治むるを經濟といふ。世を経め人を濟ふといふ義」であつて、社會全般にわたつての論であり、その内容として政治經濟道德を論ずるに當り經濟を根柢としてゐる一特色が見られる。これは恒産恒心の儒學の考へ方の祖述と思ふ。又貴穀賤貨尊農卑商といふ傾向が強くあらはれてゐるこれは農民をでなく農業を保護するといふ事等に於て甚しく武家中心的の考へ方であるものと思はれる。即ち自己の經濟的基礎をゆるがす町人の擡頭に對

する特權維持の努力が儒學の影響の下にまごめ上げられた經濟政策である。云々

明治維新の財政政策(特に御用金及太政官札に就て)

船津 勝雄君

明治新政府は財政困難であり増稅政策に出るは不可能であつた爲獻金獻米の策に出で次いで人心安定後御用金政策を取つた。其實施は困難であつたが官札發行までの政府の頼る唯一の途であつて國民と政府とを接近させる原因となつた。政府は御用金から不換紙幣發行に移つた併し國民は政府に信用を置かず又不換紙幣であつた爲流通困難で當局者は苦心したが遂に兌換紙幣とするに及んで成功した。此官札は地方産業に影響を及し國民の企業熱を起し新政府成立の一要素となり經濟界の革新をなし遂げた。官札と御用金とは明治時代の經濟發達の基礎をなしてゐる點にその意義がある。云々

士族階級の變質と其社會的影響(特に授産問題に就

て)

布村 安弘君

明治維新を指導したのは自由主義平等主義であつた。

維新の結果武士は經濟的に困窮しそれが因となつて變質

した。其の状態は明治十年までは消極的で十年から二十年までは積極的であつた。徳川幕府が倒れ、ついで廢藩置縣なり武士の俸祿は一片の證券に化し彼等は困窮し開墾其他の實業に向つたが肉體的に精神的に苦痛多く失敗した。明治十年の西南役は物價の騰貴を來し彼等は一層困窮し墮落し不安な氣分を社會に胎む様になつたから、當局者は對策として士族授産の問題を考へ又士族も自發的に産業團體を起した。併しそれも結局は概して失敗に歸したが彼等の進取的思想は企業精神となり産業革命を起して近代的自由資本主義的經濟を導いた。云々

例會 二月十五日午後六時半より樂友會館第一號室

に於て開催。三浦教授其他參會者二十八名。大熊君の研究發表及び浦上小島兩君の卒業論文梗概發表ありて十時頃散會す。

應仁前後に於ける日蓮宗に就て 大熊 立治君

室町時代の下剋上の風潮は宗教界にも及び新興佛敎が平民に受入れられ貴族武士の上層階級に其運動が及され

た。室町時代に於ける日蓮宗の布教方法は折伏宗論であり應仁前の代表者は日進日朝で宗風の盛を來した。併し日蓮宗も下剋上の社會に引きづられて應仁の頃より一揆を起し武器を取るに至つた享祿の一向宗一揆との戦、明應の宗内の争を見れば戰鬪的精神に満ちてゐたことが知れる。この戰鬪的精神と庶民擡頭の氣運との相互關係にて宗勢の隆盛を來した。云々

・ 興隆期の江戸に於る上方文化(特に平民文化)の移入に就て
浦上 清市君

興隆期の江戸は徳川開幕より享保頃までであつて、第一に俳諧は寛永頃貞門が江戸に移り次に談林派が延寶年間に榮え次ぎに蕉風起つて江戸俳壇を風靡し、淨瑠璃は寛永年間に薩摩淨雲江戸に下つて盛になり寛永年間に京坂の巨匠下るに及び益々行はれ庶民武家の人情風俗に影響を及した。歌舞伎は寶永年間上方人の江戸に座を開くもの多く盛んになつたが反面淫靡の風を生じ、繪畫に於ては代表者である一蝶光琳は何れも關西系統のものでその浮世繪は民衆的であつた。次に江戸風俗も上方の

影響を受け經濟上は御用金藏屋敷廻船等にて江戸の幕府大名町人ミ大坂町人との關係があつた。云々

條約改正ミキリスト教問題 小島 眞君

明治新政府の外交は條約改正が根本精神であつてその準備のため多くの内政改革を要したが遂に基督教を最初に受け入れねばならぬといふ事に歸着した。併し尙明治初頭には排外の事件頻發し外交關係往々險惡に陥り易く又肥前浦上事件も容易に解決に至らなかつたから諸外國は基督教布教の自由を要求した。この内外の情勢に挾れて政府は常に彌縫的態度を取つて當面を糊塗しつゝあつたが條約改正のために永くこの態度を續くることを得ず岩倉大使一行の歐米訪問の結果從來の態度を改むる事になり十年頃は基督教は默認されてゐた。併し未だ公許されず憲法發布に及んで信教の自由が興へられ條約改正の問題に一進展を與へるこゝになつた。云々

● 明治史研究會

京都帝大史學科關係の有志の間に可成以前から其議があつた明治史研究會が愈生れた。去る二月十九日午後六

時半より樂友會館で第一回例會を開き、三浦教授牧助教の講演あり、終て會員相互に意見交換あり眞摯な會合であつた。本會は會員は廣く學内外の維新史乃至明治史の研究者及び同好の士を包含する筈であるが、最初最も眞面目な研究者を團結し、次第に發展する計劃で、毎月第二火曜日に例會を開き、學内外の専門家實歴者の意見を聞く筈である。

明治維新史の研究法に就て

牧 健二君

明治維新は古き日本の最後であり新日本の始る時であること云ふことが最も強く意識される點に價値がある。歴史の最も若い時代であるだけ資料が豊富であり、同時に歴史家の得意な歴史的展望を不可能にする。以上の特徴の故に其處に特殊な研究方法が無ければならぬと説いて過去の歴史家の研究方法を分類し、之を具體的論理的に説明して、最後に原因觀及び結果觀に於て歴史家又は専門家の陥易き弊を指摘する所があつた。

國憲案に就いて

三浦 周行君

一昨年入手の東洋大日本國憲案の最近の研究を發表あ

り。之は大隈參議が、明治十四年三月奉呈した意見書に添へた云はれる憲法草案ならんこの説を否定するまでの経路を述べ、畢竟當時の自由主義者の手になつた私擬憲法の一つであつて、特に米國思想の影響を受けたものであることを指示せられ、當時民間に國會開設運動と共に憲法研究も盛であつたが政府は獨逸流の憲法思想を範に取つたが、其等は英國流乃至佛米の自由主義を歡び、欽定主義に對して民約主義の論争激しかつたこと、其の後者の一例として此國憲案の内容に説き及び、その我憲法史上の意義を述べ、最後に明治史研究上至難な資料の識別の困難なることを説き、研究者の注意を促さる。

民俗談話會

第六回例會 昭和三年九月十七日、於學生集會所

八丈島の話

吉田 三郎君

八丈島の人民は細帶をしめ跣足である。そして頭に物を戴せる習慣がある。食物は芋が主で米は少い。家屋は風の強い爲屋根の勾配は急である。婚姻は自由にして、女子月經のある時は別火をなす等古い風俗習慣が今猶遺つ

て居る。云々

おはぐろの話

三宅 宗悦君

おはぐろは古く枕草紙宇津保物語、源氏物語等にも見え、女のみならず、男女も此をそめた。おはぐろは順序を立て、塗るのであるが、或地方では植物果實を嚙んで黒くする。而して齒を塗るに忌日があり、結婚して後齒をそめるが、結婚せずとも年がゆくに染めた事もある。云々。

民俗學の取扱について

池田 源太君

歴史的事象をそのまゝの形に於て批判するに一は純粹なる理性からおこる分析的のもので藝術史、文學史等此である。第二には解釋する事である。即ち自身の經驗内容から此を解釋せんとし、その經驗内容を以て世界を把握せんとする。民俗學はこの解釋こいふ點で歴史と結合すべきものである。云々

第七回例會 十二月十七日、於學生集會所

滿鮮旅行談

文學士 水野 清一君

支那の家屋の構造形式・衣服・家具調度品、此等には好

んで赤色を用ふる事を認め、滿洲では有名な盜入市を觀た。朝鮮では家屋殊にその千木に興味を感じた。云々

常陸國の年中行事に就て 文學士 肥後 和男君

常陸國では正月の嘉例、田の神に對する行事、田植の作法等面白い。殊に田植歌は少くも足利時代の古詞を存し、第二句より始め第一句を最後に唱ふる點に特色がある。云々

第八回例會 昭和四年一月二十七日、於學生集會所

酒に就いての斷想

森 鹿三君

蒙古のKumis(馬乳)馬嬾子によつて酒戸の神が胎鹿である事に暗示を與ふるものこなし、古記の牛酒は鹿酒で此亦Kumisと關係あるを思はしむ。次に古代の酒が女性によつて造られた事を延喜式に見ゆる刀自によつて説明し、それは女性の有する生産能力を信じ、之が一種の儀禮に迄發達した。云々

御蔭参り

文學士 佐藤 虎雄君

御蔭参りは親・兄弟・或は主人に告げずして、ひそかに参宮する事にして拔参とも云ふ。記録では寶永二年以後

の事がよく分る。その道中では諸侯・富豪の布施があり、参る人は菅笠をかぶり、杓をもち、或は「ほごこし」の書いた旗をひるがへし多勢で行く。群集心理にかられたものが多い。その奇瑞としてお祓が降り、病氣等が治るこいふ。云々

門飾りに就いて

井上 頼壽君

伊勢國では蘇民將來の門飾りを用ひ龜山では「つほまき」こいふのを用ひる。各地を調べてみるに門飾には地方的に差異あり、その分布を考へるに興味ある事實がある。云々。

リーブアース先生の事ども

文學博士 西田直二郎君

滯歐中、一九二二年ケンブリッジ大學に於て研究中、リーブアース博士に師事した事を思ひ、博士の民俗學研究法に就いて述べ、其指導の學會のこゝ等より博士の講義著書に及び、社會組織の研究より、民族學方法としての野外探訪、また、其論據たる“exact Method”について論じ、「Toda 種族の研究方法及び History of Malnesian

Society の第二卷についての所感を述べて、文化傳播説の民俗學的な解釋を言ひ、日本の民俗研究の希望に言及した。

第九回例会 二月十五日、於學生集會所

博多にわかに就いて

有光 教一君

博多にわかは何時頃から始まつたかは分らないが徳川時代の末からものに見えて居る。爲政者或は武士階級に對して町人が鬱憤をはらす爲に、にわかが利用されたと言ふ話より舞臺装置なきについて述べ、それが至極簡單で大抵三場、長くて五場であるこゝも、囃子は太鼓、大鼓、小鼓、摺鐘、篠笛、三味線を用ひ、後には面やボテカヅラを用ひた變遷を説いた。今は大へん衰へて南座こいふ小屋で時々上演せられるに過ぎない。云々

支那古代の舞踊及傳説

文學士 小川 茂樹君

Granet の著 *Dances et legends dans la Chine amienne* の舞踊についての所論を紹介し、古代支那の神祭と舞踊の關係を述べた。

沖繩見聞談

助教 金關 丈夫君

會 報

寄贈交換圖書

史學雜誌 四〇の一—四 史 學 會

東洋學報 一七の三 東洋協會學術調查部

歴史地理 五三の一—三 日本歴史地理學會

考古學雜誌 一八の一二、一九の一—三 考 古 學 會

人類學雜誌 四四の一、二、三 東京人類學會

民 族 四の二 民族發行所

史 學 七の四 三田史學會

國史ニ國文 四八—五〇 立命館大學出版部

東北文化研究 一の五 史誌出版社

地理雜誌 二の一 國立中央大學地學系

經濟論叢 二八の一、二、三 京都帝國大學經濟學會

社會學雜誌 五七—六〇 日本社會學會

史 苑 一の四、五、六 啓 明 社

刀劍研究 一五の一、三、四 南 人 社

最近沖繩諸島の人類學的研究に赴いた土産話であつて奄美大島の間にはアイヌ的なるがあり、那覇に於ける人々の面貌をいひ、また風俗としては人力車多く車夫には老人が多い。此地では組踊と云つて我國の歌舞伎の如きものが行はれてゐる。墳墓として見るべきものに按司の墓、また山の洞穴内に存する墓には石屋形、甕棺、石棺が用ひられてゐるこゝ等興味ある觀察談が多くあつた

〔佐藤記〕

國學院雜誌 三五の一、二、四

國學院大學

龍谷大學論叢 二八三、二八四

龍谷大學論叢社

龍谷大學史學會々報 一、二

龍谷大學史學研究室

宗教と藝術 九の六、一〇の一

龍谷大學文藝部

觀 想 五五—五八

觀想發行所

史蹟名勝天然記念物 四の一—四

同保存協會

伊豫史談 五五

伊豫史談發行所

明治維新史(井野邊茂雄著)

ロゴス書院

名古屋温故會報告第十二

名古屋史談會

吉田新田古圖文書

吉田勘兵衛

富士の信仰(井野邊茂雄著)

古今書院

Teijuh, Wada: American foreign policy towards Japan.

The Toyo Banko.

● 會 員 動 靜

● 入 會

東京市本郷區臺町六一、第一春秋館内

小島 鉦作氏

(右紹介者吉村茂樹氏)

松江市松江高等學校

青山 公亮氏

(右紹介者那波利貞氏)

京都市下鴨知四明寮内

保木 俊夫氏

(右紹介者秋貞實造氏)

京都帝國大學文學部史學科

内田 吟風氏

同

中村 忠氏

滋賀縣彦根町中組東

奥居 重金氏

臺灣臺東廳鹿野小學校

植藺 仲藏氏

支那上海

東亞同文書院圖書館

(右紹介者島田貞彦氏)

三重縣神宮皇學館

米田 稔氏

(右紹介者佐藤小吉氏)

滿洲安東第一小學校

山口 藤三氏

滿洲公主嶺小學校

菊田 善重氏

(右紹介者横地得三氏)

● 退 會

岩見 藤雄氏 上杉 貴子氏

内田 清長氏

● 逝 去

右謹みて哀悼の意を表す